



今もむう、系橋中川の寺よらま  
こ新東山園崎の昔の庵よかよま  
位々もともや十のよはりの花の  
年さらけはきく、乃おゆい  
芭蕉公の夜句をよみて  
あふその世は形つゝさのあまら

一  
一

一  
一

去芳の蕉翁句集乙洲の及小文  
史邦の少文の庫支考の及日記  
桃結の津妻の島風園の泊船集  
多門人の古き句集を編輯  
この芭蕉句集のいさゝかある  
芭蕉翁の句集を著述して

上  
一

この句集の芭蕉翁の句集  
乃ち芭蕉の句集を二冊  
物一冊花畧月夕の好士の  
袖あすの句集よりあつた  
業林井筒の句集の及ぬに  
よりその句集をかくる年

歴の次第を書き入る年歴は  
分ける所を抄の句題の字を  
み書き句体も逐行書きを  
志すむ四季のあつらひを  
集乃事と云法集の中にも  
あつらひは乃句集よりと

句選もあつらひも六百字句  
たりしは抄の書き不拾と  
あつらひをさうと云ゆる句を  
追加するせるも千餘句と  
まうらひの心は思ふ  
河中もさうと云ふ

あまのついでにさきこころを後世  
人々にいつておぼせしむる事

安永五年己酉月あまの草をうらな

世に及幻阿彌

芭蕉翁菰菰句集上

春

庭洲のほろ誰より今朝の春  
あまのついでにさきこころを後世  
人々にいつておぼせしむる事  
あまのついでにさきこころを後世  
人々にいつておぼせしむる事  
あまのついでにさきこころを後世  
人々にいつておぼせしむる事

嵐雪の許りて中月小袖を結ゆれ六  
 誰かゆく海の中ゆくを物乃とらふ  
 音の通るを結ゆればとんと酒  
 のくおとすをえ日まそと結て  
 餅くむとらふぬ  
 二日にともぬるまを結ゆれば  
 まま立くまを九日乃聖山に  
 え日は田に結ゆればとらふぬ  
 都のうきを結ゆればとらふぬ

薦を結て人いそを結て  
 結ゆればとらふぬ  
 三日只は田に結ゆればとらふぬ  
 大津路のゆき結て  
 結ゆればとらふぬ  
 人まを結て  
 結ゆればとらふぬ  
 蓬菜小袖を結て  
 結ゆればとらふぬ  
 子白に結て  
 結ゆればとらふぬ  
 古畑や昔を結て  
 結ゆればとらふぬ

よくつんねと芥花をく垣根に  
萬葉下りふらまゝの女葉を  
一と勢子一度つまらさうか  
うとまゝや本邦にうらぬの  
美多や解き書きたる掾の先  
こは梅も牛も初まて啼つ途  
海草のある庭まで  
毎まにまき梅も余はたき  
海草のある庭まで

上五

梅の古果を梅り成り

一 秋風の備の山家とよふ 二句

梅も一おのや鶴城ぬき  
梅木は花もぬすこふ  
う先もやまらう藤とふ  
あまも梅の心もたは梅の志

山家

も鼻ももまも梅はけの  
伊勢山家うらふ物あふ

夜より燈をそそぎとほ馬を以て  
阿まきまのり

暮ふ白へうにちる岡を梅乃花  
門人何れもそそぎくまふ  
馬乃勝しく

わきまをたもと敷の申す梅のまふ  
伊勢の非垣の月よ梅一本のまふ  
子よは館の後より一本のまふ  
は子良のまふ一ゆりゆりゆりのまふ

上  
六

細代民部息ふあひまふ

梅乃木に物やとり木や梅をまふ  
園女うまのまふ

暖か屋の奥とのゆのーゆゆ梅  
山里を万葉本まふー梅をまふ  
卓袋真つ月待

月待や梅うけけり山ゆ  
黒をこまの梅打乃るを平の鞭  
妻もやくーむゆのふ月と梅



去すの伴へまよふ人の事なるを  
草女頭のことし梅のすこし梅のそら  
梅のそらの山と見れぬ山は梅のそら  
何と来新八去来此二月十二日  
ある日とて一周年の程に父梅九子  
乃方へ中きりて  
梅のそらにむうしの一文字を  
うらまへるよるまの事なり  
紅梅のそらにむうし一文字を  
上七

乙州江戸へ越く時

梅のそらにむうし一文字を  
うらまへるよるまの事なり  
かそらにむうし一文字を  
うらまへるよるまの事なり  
梅のそらにむうし一文字を  
うらまへるよるまの事なり  
八九間をく西の山柳のそら  
筆に押かたてて山柳のそら  
去すの伴へまよふ人の事なるを

吉母の昔話水巻 二句

凍るゆき中半に汲かき清くみ  
まらむれくくつふ雪下り那

尾別を寺奉納

雪寺やゆめ窓もまはる  
春もや道もこのまに草乃道  
不性やあま起る下り春の雨  
けし雨や善吹く浪川や那ま  
まらむや蜂の巣つふ至招乃漏

作於の國は波の底新大佛を

丈六く陽光を高く名をうへ  
かきまやまのまはれは一二寸  
陽光をくく肩より川あなれ  
かきまやまのまはれは一二寸

指針くゆり

瀬の糸ついで来よ瀬田のたぐ  
袖よりくえん田螺の海士のひまをちま  
藤ふすくく白糸も糸を清ぬくま

暇やあつ魚しるまのり一寸

夏別

鮎の子跡ふあさる別うさ

観子圖後

白魚やあま目をあくは乃細

老慵

蛎よまも海苔をへ老の夢もせて

一子里ヶ汗あく

海言汁のも縁入をくろし夢若梳

おろくやあまをあて海苔のあ

二月半に熟りて

水くやこもるは傍り夢の春

是精の刺ぬき醫問其をなま

知むる小瓶の刺し改る那

伊勢くして

糸短やこもるかけしは舞舞傍

糸短の室をきそ西の洞をいひ

増を乃信をぬむ二句

鯨よりまゝくちぎるまの嵐の舟  
何乃まの蒼もも志は白公の如

莊子臨饋

唐古の龍借とらん飛くく  
蝶のとふくくく神力の目影のふ  
起りくくわの友まきんぬる胡蝶

名木亭

蝶の羽の身なこゆる埃の塵根  
古地や畦とふも水乃も

まきこ目も晴くくくぬを産く那  
系中や物もつらひ啼ひさく  
雲者よりよみやまらふ味あ羅

高野まき

父母乃頻りくくく雛子のまき  
ひくく啼中れ松子也雛子終く  
蛇くくまきも思くくまきの聲  
杯くく泥子落くくむくく  
煤あつて埃くく家下くくつあ

雀子と多啼みの守籠乃真

田家にあつて

麦飯ややつてゑう猫のつ戸  
猫の急やむとた圍乃然月

湖水眺望

辛崎の松と花をり眺るる

家らまて故人再列

二投又見れ初より鹿乃角  
雪の白と落し雪は梅の都

上十一

落さるまよ水かゝりり花椿

梓打の機

は槌乃むり槌と梅のまろ

山崎まろ何屋のいりまら水草

呂九う詠まろをまらひんてむ

雲序よ重あてまら八塚のすれま

善提山

山崎のまろさ告と母老あかり

二高軒

教つたも東門をむくくはるも東

蘇氏尚令有職の人よの事ハ

物新名をもまのつぬ萩乃わの葉も

第令の画後

薄さくくもさやさくや厚さの家

木乃の情もさや生あくさく凡く草

ま柳の泥もさくさくも波干水

ゆるさく人よ徳と杉風別珍

うけり

草の戸も位くもか代る雛の家

伏ん西巻も位上くもさく

我衣もくゆもか拙の毛もせと

まま垂も拙様ゆり内人よま角

嵐さめり

友乃子に拙と様や草結候

魁へも解もさかぬ拙の花

咲もくは柳の中もく初さく

伊加と聖葉師寺初會

初ささくす折りもくあふ日影く  
顔くしぬあふもあふく川橋  
茶良七重七重依藤八重梅  
西の橋をまき

多儀は風打くゆらん山さくす  
雪もく世を経てあ人土芳  
古仙寺にあふ

命あふの中ま居き梅の那  
山はくす瓦ぬくそのまの二三

権九子お君お野花見渡さあひ  
くさやうりく

換くのりねきひあき梅のふ

冬のはに事対々

芽解はく梅のさき梅木笠  
梅のまきくや田くは里に里  
廟あく酒くも陰やちらはく

山家

梅のまきく山嵐おのささく

似や—や豆の粒先—に桜の葉  
木立のしきけし輪もはらけり

万平別墅

春の夜を桜の影に  
春の夜を桜の影に

白雲のたみ

うらま—夏世路の山さ  
阿蘭陀も花の葉にけり

愛方知酒聖負免鉞神

花よりきせわの酒白く飯も  
艶かきやうきもや誰うそ乃  
世つらけり花も念佛や  
葉畑のさかすか雀の  
観音の覺りやうの  
花のさき七の鶴の  
花のさき七の鶴の

物皆自得

花より遊ふ社なるとひそ友す  
鶴乃巢もさきそ葉の葉



茶の巻

花の世に鐘をよ上響らけし  
お美捨本とら谷の先本とら事  
あつきのふまともくゆらハ  
らふくはまの二様の事  
ハくともくして  
さや花のあつり乃  
糸清も花見の坐りハ七  
軒舟居小孫を合さく

いふもつり

ふもつり  
花を合さく

花の世に鐘をよ上響らけし  
お美捨本とら谷の先本とら事

あつきのふまともくゆらハ  
らふくはまの二様の事

ハくともくして  
さや花のあつり乃  
糸清も花見の坐りハ七  
軒舟居小孫を合さく

草屋村まで

花の陰 謡子 似る 橋邊の那  
かつら 杉の林 兼を通る 四方は  
さる 山を 登り 下 家 あり ぬ  
ぬの 糸を 巻く 敷き ぬの 糸  
ちあ ひと 人の 心 ぬく 世  
つと 伝 へ  
おの 心 花の ぬり 井の 敷  
二人の 畷を ぬり 伝 へて

くさかま かの 心を 浦の 心を

路草亭

おの 衣の ぬり 雨乃 心  
伊賀の 園花 垣の 心を ぬり  
乃 乃 手 様 の 糸 ぬり 心  
つと 伝 へ

一里 ち ぬり 花の 心 ぬり

藤巻 橋 木 心 ぬり

ち 手 の 心 ぬり 花の 心 ぬり

珠碩の酒は事の花あつて

空方よるまを以入事さう湖乃彼

尾張の人より信酒一樽本るの指活

糸一程短くしを以今よむむて

飲ゆく花生りせん二杯樽

肅山のりまきと推雪の画を琴乃

懐く

友花やるもはれさく双々結露

僧専吟鉢別

結露毛のりまきあつてやものそ

病活云々

あけの房も何れん花乃と也

云序子深川の藤合をさふ

花夕べのりまきあつて柳系

梅をさく梅をさく梅をさく梅を

さくのりまきあつて

花夕べのりまきあつて風の象

上母の花夕べのりまきあつて

うきうきした地のきりぎりすはさき  
さかかたりのきりぎりすはさき

四つめいさの梅ぬき見こころの  
支考東の鑑別

世ころ推せよ花より又一々  
幅幅も出ようき世は花よりき

路通もはやくきりぎりす

きりぎりすはさきの花よりきりぎりす  
みればはやく人みききりぎりす

きりぎりすはさきの梅店をきりぎりす

跡踏まきりぎりすはさきの花よりきりぎりす

丹波市はさきのきりぎりすはさきの花よりきりぎりす

きりぎりす

きりぎりすはさきの花よりきりぎりす  
山吹の家はさきの花よりきりぎりす

西河はさき

きりぎりすはさきの花よりきりぎりす  
きりぎりすはさきの花よりきりぎりす

画後

山崎のやう治の焙炉の白ふ時  
種草や花乃はつり世を愛阿の  
白鳥の喜やわたり能桜あさ  
こまの船も西や二葉乃茄子こま

初瀬あそく

夫と花おや花より人ゆり一葉の隅  
鐘撞ぬ里なき何をうけを花とまこ  
はまきりーわたり浦まを退けり

お逢之ふ里花をこ胸子あそくで

初春や花を飾り魚の目を花とまこ

至湖水情あそく

けしき成りあそくの人と花とまこ

夏

卯日迄と連唐中の里を越え

ついでに

夏は素早の風をよみ

旅行

一ツ程をこゝろにおゆぬ夜はえ

はしりゆく梅の影はうり

清くはるん早の春程く都云

時をなまこゝ飛越へるは

はなをよみ魚を細くまはのこ

よひついでに鳥の飛来をこ

ころなまこゝにこゝろをこ

ころなまこゝのちをこ

古戦場のなまこゝをこ

ころなまこゝをこ

のまこゝ

須廣の輩の矢先子晴や子規  
ほしくはさしほゆくゝや鴻つ  
西海まねたれ言角とふ下舟  
やらのあや

藤本もやさしく此宿衆の時  
被代も馬を送る此台付の男  
経冊はさきとてふやうにたを  
てふはさしほゆくゝや鴻つ

孫を懐くゝるさきむけよあふ

不卜一周年忌秋風如進

ほやまは次晴もあまき硯糸  
京ぬくまき京形ゆゝや時を  
あやのあや

蜀魂大井菽をももふ月夜  
ほしくはさしほゆくゝや鴻つ  
木このあやまきもあや杜宇  
為絨書はあやもあや一節公  
保くまふも縁くまきの村一屋花

一あつの江も横もやちしき  
お少くは来あう横もやちしき  
暖やまの朝日中かちしき  
思ひも守本もやちしき  
きよきもく鹿の子さしむちしき  
けりりちあそけのちしき

灌佛の目かちしき  
灌佛や雛手合するちしき  
友来くもさちしき

楳の実や花形も世々酒  
園も大顛和尚も月世  
ちしきは化し給ふちしき  
ちしきもあつちしき  
ちしきもあつちしき  
其角も五七日退き  
卵の化も母も身宿もちしき  
ちしきもあつちしき



知豆亭の遊楽ありて

杜若のわらふ子昔夢向花枝をひらり

大坂也或人の許まを

遊子花かゝるおも花のむらゝのふ

山崎宗鑑屋後まで近思殿乃

宗鑑まゝて説くまゝかゝるゝと

世しんゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

みかゝ身海あんかおつゝと

もはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ 杜若

白うゝや雨雨の花枝咲つゝと

贈杜國子

白茶子に抱もゝく蝶のかゝゝと

漁人の彩ちゝた茶子花のゝと

くゝにゝゝゝゝゝゝ

雲の影まゝのゝゝゝゝゝゝ

雲はゝゝや夢解の種ゝゝ出つゝん

伊豆の園軽う小崎乃葉ゝゝゝゝ

志直は秋ゝゝりけ御ゝゝゝゝゝゝ

ゆめくさあはれ花の道しるばしるのくちん  
のあやうき治をきこひまのうたれま

いさやふし梅麦とらんちんあまうら

甲斐の國山家母さうりく

けり物あまうらうくさむやうらまの難

麦乃穂を圓くうらまはく啼ひまう

武府をむく古き歌く河清まを

入くはるのまうく餘別の句を

あまのうら

麦の穂をくよらまうらつてむ別うれ  
うら相葉子う洋ふあうら今や  
東つらんうら

あらんさ葉ふくく分ゆる穂のあまうれ

贈 拙隣 新宅 自画 自傍

あまのうらあや 牡丹乃花の蜜

招提うらて 盤真和尙の法彩をば

法目れ音をせ給ふのうらうら

あまの葉うらて 法目れ音をせ給ふのうらうら

日光うらら

何れきうく青の葉の女家の日光

後磨の浦一見の時

すさくちの影ぬるさくたまひ

雲の影も奥の併信和尙の山居乃

はあり

本家の意に居るやぬら次女あきら

ふ心の奥國をふり取り人の住捨る

居あり幻信菴のふは後磨の

信海とて自ら夜眺屋よりまん侍

甲日持て先忍入る

先事おむ推の本もけりう反本を

松風乃屋系う水の音す

清風や浪平ちるるむ青ね葉

甲遊多山中

山跡乃ねる心因るむらうら

あう山叢の志きりや風のす

大垣の城を日光御代系勅を

唐從を園田何素ちんしん

岳のふみ袴よかきうーあういふ

画談

るかしく我を強うさう反世

落拵のめーおさうさうあういふ

うさうあういふ

とゆふ人丹きうんさうあういふ

抹負ふ人を枝折乃夏中う非

殺生えんらう

石ひきまや、反りまあく、まねるゑんー

高館

葦草や兵とも、後世の流

牛のふや推しきこの強れさうい

小巻を巻うさう

うまゆーや牛のふとぬる人の果

うさうあういふ源川の唇をさういふ

うさうあういふ牛のふとぬる人を果

能那ー能那うさうあういふ

うた我をらしき一うきよかんこも  
遠出よかひ屋う下乃ふまのきり  
わのう有ち敷の小ききいふ張走れ  
かつ不賣いふゆる人を碎きん  
鎌倉を生きく出あんとしり  
くらみ乃流せ

水耐を流下り流るや夏の初  
あや光生り新の齋乃さきこ  
信士にいふまそ又因言を園水る

を刀を流又日とや流きくまて

花のやめ一夜よか水一りゆんか  
佐者屋自ら書紙のきり義經乃太刀  
糸共うきなをとあし什物に

笑ふまを刀も五月母のまじ紙幟  
仙臺子入るあやゆふく見書子かた  
とま若らう紐の流紙付るま鞋と錢

あやゆふまはしり結んま鞋の流  
標ゆふ行もはたまむきふ髪

病中自叙

髪もくもくの中容顔蒼蒼一五月雨  
はらりてきつりかきまぬ物も淋雨の掃  
箒掃き除くは此の五月雨よまらぬ  
けりもつらぬぬきか余もまらぬ  
まらぬまらぬとさ見たりぬら  
先堂もまらぬちりまらぬ珠の麻  
風もまらぬ金の程まらぬに括り  
五月雨忠降乃くくくや先堂

五十九

はらりてをあらぬまらぬ川  
日は道や暮かぬぬく五日雨  
露掃金まらぬ

五月雨や色氏のぬきまらぬ  
まらぬやまらぬまらぬまらぬ  
露沾公まらぬ

まらぬ子鳥の浮原をえりん  
大井川のまらぬ徳田極本氏子のまらぬ  
まらぬまらぬまらぬ大井川

五月五日の道草花思ふゆゑに

月千が家姑や時さく五月五日  
後河原やふ掃も葉枯白と  
眉掃を伴ひしと ねかち花  
つましくと枝の花の神年ちか  
せんさうと掃や面枯 必きり

幸つ己白身に日こぬあつて

やうちん蒸の枝をちかす日す  
象深や西千 西抱り福ふの花

栗の木陰をちかすて世のふ  
僧あつ可仲とふ

世の人乃ん身ぬふや新の葉

筆白らふちかす武隈の松見勢

中世まはらうと錢あしりきん

操よらま松を二木を三月こー

世の志や影を小庭枯別度妻

あらしさや帷子耐乃うまは美

落柿舎

柳花の影をみるむく一息の料理の間

森川許六餞あ二句

桂乃花の公女を似よ十本雪の積  
うた人花梅中もかきこへ本を花縄

山中逗留句

登風馬の尻すく 花ゆき

この境にひこまはちくくつとも交

乃ちや

うけあり南あつちもよは慶あひ

あつちくくく 荆をいつくむあつち

本を雪路の穂思ひまきて大津より

ちるはあ乃雪見に出る

くたはらる田の月よりくくえん

草乃葉をさるよるまふはらるふ

あつち雪見

あつちかや 船頭酔くさるあつち

己う火をさるの雪やあつち乃者

さるあつちそるあつちあつちあつち



奥州白川あり

關守の宿哉も鶴子同くあを

大津湖仙あり

この宮占水鏡もしくぬるかき

露川ももろさなまをさしはり

たに山田氏の家平あり舞す

水部かごと人の心もむ仕を治り

移御もふあつはらへと幕中

心もむかやうあり

中もまごむせいの川乃結 鞆

移御も通へるあつはらへ

松もろしてやそぬれた移御も

飛折く思ふも平ねも早苗れ

清水もも移御もあつはらへ

あつて田の畔もあつはらへ

とあつはらへは柳の影もあつはらへ

結りつ

田一枚極もあつはらへ

奥が今の白川を渡る二句

子苗も家色もまじりぬ

西へ東へまじりぬ早苗も風色も

多窮らふもまじりぬ白川の関り

さしつゝやまの関り

風流のこゝやまの関り

志のこゝの里もまじりぬ石を築く

こゝの関りもまじりぬ志の関り

等付一馬の力もまじりぬ田植

尾張のこゝ書道もまじりぬ

世もまじりぬ代々小田行り

おまじりぬ後持の関り

重行もまじりぬ

先つゝや山を出ぬの初茄子

徳田極平氏も

昔もまじりぬ葉もまじりぬ

舟船日

陸もまじりぬ舟もまじりぬ

明石夜泊

晴き夜もたつ形もいふを夏は月  
月をふらふ物もいふは夜は夏  
もともともたつ形もいふは夏月  
夏乃月法油よりあつち赤坂

曲習多事

さつ乃おやあつちいふは夏物  
指すもあつちいふは夏物

稲葉山

持鏡念ふもあつちいふは夏物

立石寺

案さやあつちいふは夏物

多事迅速

やうそ死ぬ事いふは夏物

人子帽子

いふは夏物いふは夏物

盤盆

圓扇もいふは夏物

佐野の中山を

今なるも月川の舟差の下すくそ

風瀑を越別き

月子種まハ小夜の中山をそす免  
破風台に月影やとらふ夕まをみ

長谷川十八樓

此あゝ重月よんゆふとれ皆まじし

尾花沢法風亭

涼き江の川舟あてに舟まをちり

すくもやかの三日月れお黒山

あつも山や吹浦りけて夕まをえ

ゆくもや船腰めまそし海すし

花枝と漕とよままう橋の老木

西の江の記念亭のそら

夕まれや橋まをくむ浪乃花

小潮まを柳まをくもや雲をう彩

長谷川系納涼

川風や岸のまをくも夕まをくそ

田家

飯あかく嬉うちそくや夕すらん  
川中能根まよふらふすこの水

聲地軍居てもよきなり

まじはらるる園子もる位あふ

無憂えうら海を松を極るまで

涼さやましくにせ松の枝乃形

まじはらるる園子もる位あふ

風のまも急南よまじはらるる園子

羽黒山

有るやまををかちり 南 谷

丈山の像平得は

風葉あつ羽織も襟もつくろひを

さへ波や風のかほりお お松子

小倉山常宿まのり

松抄をほろくや風結かほる音

雪のまじはらるる園子もる位あふ

湖や異なれおむやう乃峯

本間と馬の家名を稱して二句

ひらりとと阿らるる廟や中々のぬ  
蓮乃香に目をかきまはや面乃鼻  
夕影の白くおのほ葉よ紙帽とて  
ゆふのほや酔く影去き窓の穴  
夕かほふ下顔むつて遊公あり  
まを影の年い米揃きむむ衣を李  
籠る花のみりの夜終るまを  
まをまをまを白の笑ぬ爪むらん

李由の件へ又のまを信

まをのまにゆきまをまをのまの山  
何ぞねはまをまを古きまを  
爪のまをまをまを下にまを結の程程  
まをまをまをまをまをまを  
接面のまをまを

ゆきまを花まをまをまをまを

松葉山のまを下

山のけやまをまをまをまを

初まの舞も何やとて人遊もやせん  
花を愛と一夜も此れはさうゆふ  
夕ふも初まをまつうはゆりのを  
初まを平よとてさすべし瓜の泥  
柳ころり行なはるまゝ初まの舞  
之道を愛して

我より似れ二ツに月あり一ま舞あり  
ふらふ皮むつとてや 昔も其ま 聖

正成像 鐵肝石心此人之情

接子平かたは初細や楠の 家  
酔と酔ん接子笑る 石れ上  
藤の宴と泥濘よせん 空のあと  
されとるもいよる 清水の那

岐阜山

城沼や古井の清も先同ん  
那頃の温泉は林の相殿よ八世まを  
接子もいよる神二方いよるまを  
清もむすも接子も同いよる清も水

ひまふりたるや歯をゆく白髪を

昔の顔面をこゝやむ

客形よとぞ梅のこゝやまをむしり

子子と身はうらぐもなきて去りぬ

汗へしうらぐらぐ

かまきり人の小神も今や土用か

修路先明もして行者事もおぼ

交山よ足駄をおむそ途の那

秋鴉ま人の住糸にむす

山を急ぎ登りてこゝま入るや交坐交

松島

鳴くやゆらけとてもそ其志海

新なる風水亭にそ

水の行く氷室の影系柳の影

異よと日と海に入るうらぐと川

水も月とゆく病やまはるそと

こゝ月や翹をゆはれと境くら

ら月や嶺より中をゆく嵐や



不卜亡母追悼

あ向く路をひびく道明寺  
かきくさくさくふるまきさう上の鮓乃腸  
世は夏や湖水よりうるぬ浪のうへ

本節亭より

秋ちうた公のうらや 甲斐半

芭蕉翁発句集下

秋

初秋や海をまき田の一みとる  
まの妹やまきまきかたのむら  
文月や六日まき事乃夜まき  
まき海や佐渡子まきふたの川  
合秋の本はまきまきまき星乃秋

まふ事の毎七千余り七は秋七月  
七はにふまふふふ葉の七種を記す  
七株乃秋のふ本や星也秋  
又月七日の夜風を吹かぬ白浪  
銀河の星をひいて鳥籠も格を  
なす一糸極を折ぐは二星も成  
ちうしるふへし小可のふと記す  
る水も星も格極や出たはくへ  
七夕や秋をささむおのそし地

下

加美乃國をささむ  
熊坂のふりや山にたき鬼ふ  
本家のふ葉を所さ  
魂をけうりふも焼場のふりふ  
尼も壽貞のふはらふもふ  
救ふふのふれ思ふそまははら  
草のふや折くはのまふ鬼もふ  
中野里のふりふもふ  
中野のふ枝りふは枝乃葉を系

ふもくく宵圍くト一生の般年  
の書中のも或は字のすまよふも此處  
ふ賢ぬく花の下や墟墀  
古田乃社まゝのま盛の世縁の  
切をこして

むさんやる甲の下みまくりくす  
床まきましく麴子入る如起里く尺  
情転やたつまこゆひ一ちまをる人  
樂は座ま小海まよま一ひくこひ

故懐ももるそ秋ある葉書くゆ那

寄書下

松つるまをよもくく周の孤燭をま  
このやまらるまを待まをるま小  
或智識の目まま禪大底のりこ  
こやんまをこして  
いかな書あつてはらるあ人のまをまよ  
いねつるや海ら面をまをまあう次  
格書や園のこり五位まをる

お向の馬の毛の龍馬の毛の  
被さかまへに熊の毛の  
毛の毛の毛の毛の毛の毛の  
乃の毛の毛の毛の毛の毛の  
毛の毛の毛の毛の毛の毛の  
毛の毛の毛の毛の毛の毛の  
毛の毛の毛の毛の毛の毛の  
毛の毛の毛の毛の毛の毛の

稲妻のやぶのふりすの木の穂  
二見乃浦めぐ

祝うとひ後やうのねた石を  
かへくのははみく

あま〜〜〜  
畫讚

西行のうらもあまの  
あまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまの  
あまの

乃のあまのあまのあまのあまの

開きぬる目とる海へくさるる  
あかきつゝあかきつゝ

雲一と神は雲にたぬ目とるあかきつゝ  
牛部屋に牧の雲とるあかきつゝ  
あかきつゝあかきつゝあかきつゝ

秋すくくくあかきつゝあかきつゝ  
金昌子にたぬ目とるあかきつゝ  
あかきつゝあかきつゝあかきつゝ

あかきつゝあかきつゝあかきつゝ  
あかきつゝあかきつゝあかきつゝ

和角蓼蟹句

あかきつゝあかきつゝあかきつゝ  
あかきつゝあかきつゝあかきつゝ  
あかきつゝあかきつゝあかきつゝ  
あかきつゝあかきつゝあかきつゝ  
あかきつゝあかきつゝあかきつゝ

傍わさくふく死かつふは乃松

嵐雪の画に漢を望みしを

朝顔を下りてはまゝくゝるる事

括ららるる人々廊外まで

ふさふさふさふさ

朝白の酒のまゝらぬはうり

閑閑の流り

柳の白やまゝく潰ちるは門乃垣

暮れやと急まゝくわのふたうり

朝顔のたより啼ゆく敷のよ

暮れや一夜まゝくせし乃大

抱く妻と寐るに一間流るる

妻も二人たよりとゆるる

男はあつても変て物得る

ほの玉新得るとふは遊女

来りしとては再まゝく男は

本好

一家より遊女もねるる花と月

小松と云ふ西に

志留りたみや小松うく萩すき

新水まゝ雨中の會

ぬきくけり人もおうやるの萩

畫像

白露もあはさぬ萩のうけりまくれ

後半を序に終る事にはうき

をうき

風色やーとらに極ー庭の萩

浪打もや小貝にうー子萩のうき  
萩の種や隙をつくのむ羅生所

深川店

色も通るやうに鹽にぬかまゝおうか

こけもまゝ庭ーとらのちやんか

西綴

鶉啼やそれおに苦さ蕉やうき

さく萩くも程あきーや女は花

玉川の水おほはまゝうきまゝ

てしと云く女阿の宮り一貴後句を  
よとて白き結出のふ

其乃るもや蝶のつをさの蓮の此次  
おちにて

門下入ハ穂後ま紫の白ひの那

本は芳家のあまのあつて結句の  
人々もあま

よおれをと一まや梅紫にさるは  
まててもいふま物とるから

下七

夕影や秋を色く水歌の那

眼前

道のつれ木撞と馬中冷きさう

花むくもははくうくくはかき

さる田醫所細川まき庵ま

薬園中いづまはまを草ま

まの後くまのくも乃ち物ま

子指のまや分入る右まみ後海

むりまけ狭父屋まお授れ



之月や鳥の文をいふむん  
河津の見えそは鳥の月の  
之日月の地を揺るる若草の草  
嵐蘭の墓をいふて

又一や花の七日の草をいふ  
詠や江戸の舟をいふ山  
佳く佳く月夜をいふ  
杜牧の早行の舟をいふ  
くもをいふ

るよ海をいふ月をいふ  
月をいふ一本の舟をいふ  
明かのを二十七夜も三日  
月乃の酒をいふ  
都の人の物をいふ  
さるる思ふもいふ  
佳く佳くをいふ  
乃の中をいふ  
文科山をいふ



遠路往來能はひき

月清し遊むのりては砂乃く

陸の傍にあり

月いつと静よ志のめる海乃底

戸をひききら西より山あり伊勢より

花ももよるにちきもよる守

夢のまふ月もあはれし一侍山

又去る妻のりもあやふらんを

は日向守の妻を切て席をのり

らふし子も今よりや

月さひよめあつ妻乃けりきん

妹のあや始りまうきく月を

正秀亭初會

月代や孫子の銭屋をたぬ

鑽ぬく月さへよは神堂

はあをるよめいやはたきま

よふかりた物まそあつはあを

ほまぬをるてあひのよまを

よしの水 信長よき山その傍  
かみうらな

紫花の月やそ結まゝの坊  
そよのつらな道

檜杉のー乃やそ月の夕紗うま

四月はまのいしよこ色道  
昔葉葉を植へて 念ん 房忠月

源川のそ葉を植へて 念ん 房忠月  
川よとそ川下や月乃友

東嶺を人々湖よきよわて東野よ  
終をそわら

入月の終も机の回隅の那

月下に兒を這はるゝお懸成重く

月すもや猶もそつ奴兒の佐  
えり彩やまゝ行りうもそ月夜

月えきよ玉江此芦をうぬ先

武藏守素時仁也  
欲先とほらう



君自れに花をさかすもよみ  
あはれに梅葉の香や田舎草の  
よみのさかすもよみさすもよみの那  
と井土の門とよみや今日の月  
糸とよみ友をさかすもよみの月乃を  
と寄れをさかすもよみの月七十里  
本を伐とよみ牛とよみやらあ月  
十のあもよみとよみの料の那とよ  
やきとよみとよみとよみとよみ月乃雲

望田歌

ついでにや梅葉の香を  
さかすもよみさかすもよみの那とよ  
よきとよみとよみとよみとよみ月乃雲

二十日月さかすもよみの梅葉の香を  
さかすもよみさかすもよみの那とよ  
西行谷の梅葉の香をさかすもよみの草  
洗ふ女雨のさかすもよみの梅葉の香

并葉新らふ小庵をさるく

粟稗子すしりくもつらき村の春

知是才人集ら新宅を築す

とまやあや雀とほくぬ少く戸の葉

事う未定や新館の萩の多遠く

新久や二所のすまふ附 杉赤く

困へ戸牧事をさるく

若く穂く并又中法あく一か

接や命をかむむ 昔くはく

遊女畫續

枝ぬり花日かくかま新葉葉か

き方面乃かをを芙蓉花れく葉く

何く少く小室と秋の柳うき

秋海葉西瓜のまらぬ笑かく

鬼灯と夏も葉すくくもあきあ

あ母あく或坊か一ねをか

磁赤く我小園をさる坊うま

猿引も猿の小神をまぬか

小枝を遠くまで年別よき

物事く底引はく余波う那  
相の本子勢備たる塚の内  
奪能目乃今やとれめと啼詔

望田よそ

痛居所おきた後と旅集る  
猶す免葉の末畑や迹交  
刈詔や子福とくくの野の  
き乃名はるとりて四牛

核の裏らる様もの相もや相あ  
目子か家やまきと乃目く  
いと啼去るあや一秋の麻  
接やまのあひひ出る駒む

言解の後火とて

無火より何無や浪の下むき  
核まともふ吹く聖か  
吹とまふ所を海馬野分  
以上の破を



みちのくにを風をいへば身こころ  
運山を過るにさそふの松子の聲  
猿をまてく人すてに秋忠風いふ  
いふの事盤う塚わ伊勢の古  
うひささる美形殿よ似る秋風  
いつかおほく似たりん事おほく  
義朝のこ後ま似るま妹の風  
秋をや教もてくもあふ被乃穿  
身あてて大振うに秋忠の聲

一笑退の巻

塚もろくけりての位おまをあき此風  
つりくと目らつ事おくも秋のを  
那谷もろ奇石をばくは吉松権の  
らそく陣務のま味なり  
石山をるるま白くあたるを  
桃矢の名をけり  
梅のま乃その葉ちらすれ秋の風  
妹風や伊勢は美原にけり

彦右記銘 人の程をいふの如く  
己の長を記す事なれ

よのいへも唇をききし 秋の風

去来の許より伊勢の記りある事  
くも我の面影をみせたり

西東あそむるに 同 一 何れも此風

嵐園を悼

秋風平おとそ 怨 一 花葉の枝  
入麩の下焼 みる 秋をくくれば

旅窓長夜

九月夜起くとも月影七ツコも

車馬亭二句

秋の夜をくも霜 一 鳴 一 那  
おもくもき秋の影 一 藤 一 花 一 葉 一 一  
大和の玉井の内を

孫らや暮るるさくさむ井の如く

菊花の燈

秋を燈く 燈 一 花 一 菊 一 花 一 葉 一

多摩川乃雨

起上る多摩川のつらり水の跡  
もくもく笑け九りきりてたくのさ  
草の池のまをぬきし菊もあまたはら  
純山の宮をひらきしやまは酒乃  
あまのしをすくひてくねみもたす  
とねとね思ふゆき澄子もやうね  
らんよき

きよよひつらき今ねりし跡も葉

山中温泉

山中も葉のよねね湯の白ひ  
本因亭

かきもも葉も月と葉もは田と及  
寝もねうらひりかたも葉もつらひも  
九月の日の別三指ももつらも葉も  
も葉も月と山とをまきし葉の海  
らんやのあも葉ももつらも葉も  
田も葉もつらひも

指のまの姥もめでこし一筆おぼろ  
大門通をさうり

琴糸や古物店乃背そのの菊

行来本腕の豆のさうりそとさき

まじりの筆花の輪どまじりかた

蝶さきやとく酔をさきふ菊の輪か

休山さきうさく

新まらや菊の香かする豆腐ト

八所始り

かきくは必咲や石屋の石巻同

危懸うも男乃心裁く山家集

乃此入りまらふ

一露さしこ白さぬ菊巻氷の那

菊の香や産さしこまじり復の石

さきとの巻やさきらのまじり佛ら

菊乃まやま良ま幾代の男あり

園結り

まきけりまらかりまらまらひのま

しほふさうり目さうり

菊の如く赤良と経波もあま月也

園女家あり

白菊は自ら千々々くさるる草も所

後醍醐帝の法陵を祀む

御願直を仰て志のやう何れを忍事

本宗を扶くも世乃人思ふを産か

怨心別登

義経若くはの守実子のと拾へる

秋風の吹くもさうり一粟のい

可体亭あり

祖父と親共のさむか庭榊とん

千里を女也あり

里ありさうり榊乃木もさぬ家あり

志ぬ榊や一口とらふ榊乃つ

菊乃ち落葉と拾へハぬさうり

草うりやあふさうり子夕一と

松草やさうり程も松乃形

もつ草ややせしる敷くぬ秋の露  
松茸や〜ぬ本北集の〜付  
伊勢此巻従子山遊と〜事  
若草と〜花て〜山依  
中秋の月と〜科の里嬉捨山  
〜の〜て松と〜同中  
〜と〜月十二夜と  
本巻の〜も〜は  
信吉の市と〜

下世

外関くかふかたる月えう那  
秋もや〜つく面も月乃形  
内〜と〜てお〜は  
お〜りて  
〜と〜皆押合ぬ津遷官  
兄の〜やう〜母の白髪  
〜子〜相〜眉とや  
老〜と〜  
〜と〜秋の

秋風や桐子くさくさして昔の秋  
見よとせと御事とらふねと後方の秋  
悔やとせと入りて空をさす古の  
笛の

送る事の送るらん果はまの秋

種の濱子遊ふ

はらにや後方よからく後境も秋

小倉本に相実無以

秋の流しりやすぬき小松川

懐懐

此秋は何と道より雪より  
故郷の遠き人をさす人そ

憶老杜

風聲を吹て昔秋歎するも詩子そ

去病飛を出一時野をこく一紙

心よ思ひく懐ららるる

死もさぬ懐懐のさくくよ秋思ふれ

枯枝よかきとれとさるるなり梅乃雪

東門のやう年の像のまゝにたゞし

顔のまゝにたゞし

あつたまゝにたゞし

新思

け道やけ人形一小秋中のま

人あやけ乃滞るあきこのま

清涼のまゝにたゞし

和風乃折を免るるまゝにたゞし

行秋や身玉一たまふ之布着る

七月のふるまゝにたゞし

鈴虫のまゝにたゞし

行秋のまゝにたゞし

ゆくまゝにたゞし



冬

相垂のぬいぬい  
勢くまんとせし程子

此海より、  
江戸を立出さる

播人くわの各呼見ん初討る

下冊

一尾根をーくく  
山株へ井の社から  
初一はれ狩り  
つく志くま

草店

人くまをーくねよ  
けあや田のあ  
浮田の懸塚  
宿のして名をまの

るうこまきくく一何乃大井河  
くあそらま人もゆよまじらつ鐘を  
新葉の出そあそ早き一とれ哉  
天徳帝并矩おらめく  
伴う本結遊をらあひ志をれら  
人の方へもめあそ  
初しとれ初乃字とわの時白く松  
一しとれ初乃字とわの時白く松  
そとれや月もいもさる雲乃吟

そとれや月もいもさる雲乃吟  
全屋のねれ古ひやあそもき  
野田並ゆ水の旅を這せら田標  
昔らのの望れとらさるねと牛  
母も馬も志踏こいりあそ  
難波津や田標のぬきあそあひり  
先祝へ梅をくら乃ぬも限



京のあまきく世をいよむ信若  
ゆゑに指現をこころを

まへによわのなをちり世は葉川  
之尺乃山もあはれ本のももる

平田明照の本三抄うけ持子  
まゝに伝ふ 二句

百年に京をを返乃落葉うね  
きよくう。洞やそをそちうおき

道園居士の道名きくゆ久一

まにまにんゆと笑つて後  
其のまにに初を二載の中  
あはれやそや一巻うにあは  
まゝに伝ふ

そ乃にそらるる枯木此枝の長  
数回み訪つ社頭大子や建後地  
とちりまにんゆと笑つて後

志のまに枯く解ふふやう外  
まゝに伝ふ

花の根枯らぬをばいふはたの  
之秋とゆへるもなほ小梅の八重の友  
月人月とて来りていふと回ひ入  
結ぶ

心もこころもさうとやさば枯屋花

十月八日 楊中吟

旅中 旅中 旅中 旅中 旅中  
川流や物よまじりてぬきさるる麦の草

英法耕と別墾

下世

本のうゝに白ひやつちやうゆり花  
さるるや粉糠のかぶ白のそと  
執田梅人其甚き哀の困を思ひよきて

水仙や白き清子乃やもつり

之の白きそふりの子二人  
拙先拙後と名を対あへて

梅の白ひ拙らるる白しあは仙  
菊乃後大根結介はくはね  
鞍坪母小坊主乃くや大根引

玄席子松者まき葉根を喫し  
武士乃大根少のき 嘯う那  
冬の手折破子今新なる山さうか

防川亭

多枝探る梅子あかへる新焙子  
梅椿うま笑かめん 保美の里  
おろりく必入探るうゆん種  
芹焼やすう編乃田井のまゆ水

杜園の店を尋く 二句

麦をうつくよ記うと手あや富む  
はまきこころそあまこ記まきあおの宿  
か貝山の公金無頼う一啼こ急き

麻中

茶のむさうてそま葉の松う那  
着たあまのゆもそんせういと新の雲

深川大橋成流り時

あまのこやうとく踏をうたあ  
かしくと折ふし凍し井乃霜

成の子にもあやとて極く入る  
初雪やさいまの店より一羽ある

山中の子をたて遊ひて

雪に危の皮乃 蟻仙ま

南都より

初ゆきやりの大佛乃もくら立

極り

雪の越まや雪少信此後あはる

初雪や朴かきまの極極なる入

下  
三

雪の雪や水伝の雪葉の事ももまて  
おまきもまき一まきまの雪やらの入る

直見よあつて

市人よして是ころ人雪の心

旅人をまて

馬をまて人極る直見あつて

衆相もまて人のまてまて

中へ一人のまてまて

まてまて

昔も昔人今も月仰きお名月お  
深川ハお貞お中

手あつて中も言乃侍候や投乃中  
對友人書良

君火くけとまき物んきん言丸を  
困居の歳 おまの

酒乃めとてく様もまねおの言  
此海の歌本陣業言言に伝  
くふ飛る井種言早の君都とを

下冊

そととゆてあつてはつらつらとて

京まきくとまてくやまや言お言  
熱田の文御修書あつた

磨おまに鏡も信一も言お言  
去年の日記の巻をおまひおま

越人よ言

二人お言一も言お言あつても言お言  
言お言も言お言の言お言か言お言  
いさつらは言お言の言お言あつた



をのり音の誰人とも入世の心  
をて若の後志の里に  
とねのいまた津松をあらう  
よ若尼の許子つてか  
かろ出さつてあ  
かねの尼乃も解  
湖水離室  
比るに三よ  
つひにゆくむ

小町画渡

米よとや雪う  
雪よとや梁も  
舟う渡

山画續

つと子  
自画自續

いのかうしきまもやま交乃捨るは

照所の草屋を人く訪ひたる

雲交せよ細代の少魚若くは人  
雑炊より野野まき新のあゝ  
ねまゝろくまきまきんまこれ西  
雁さかくもおれ田面やまきうる  
かゝ鱈定ま也乃瘦もまきの中  
月花のまき針まきんまき乃入  
樽おま波をまき腸まきおま

茅舎買水

少若く樞嵐の咽をうるほきまき  
すくまきやまき上り氷る新は  
瓶破くまき少まきまき  
まき焚くまきまきまき

越人まき吉田のまき

まきまき二人捨まきまきのまき

仙たう父乃退告

袖のまきまきまきまき

塩麴の歯とまきまき一魚の棚  
葱白くはらとるまきとる那  
みよたくと帆柱さむま入江  
屋敷寺にまきとる

夜と一ツ新まきとるまきとる  
まきとるまきとるまきとる  
位つゝの磁柱とるまきとる

まきとるまきとる

おのほとるまきとるまきとる

下田

少年歌一まきとる

埋ゆるとまきとるまきとる

曲琴梳鉈とる

うるとまきとるまきとる

まきとるの後

おのほ名やまきとるまきとる  
まきとるまきとるまきとる  
まきとるまきとるまきとる  
まきとるまきとるまきとる  
まきとるまきとるまきとる

望遠の遠くをゆくはてしなく遠き

道のゆく

望遠の遠くをゆくはてしなく遠き

望遠の遠くをゆくはてしなく遠き

望遠の遠くをゆくはてしなく遠き

望遠の遠くをゆくはてしなく遠き

望遠の遠くをゆくはてしなく遠き

望遠の遠くをゆくはてしなく遠き

望遠の遠くをゆくはてしなく遠き

雁一ツ刀付くはてしなく遠き  
生れゆく一ツあまなる生海風外  
ゆくゆくはてしなく遠き

望遠の遠く

遊ひまぬ純物ゆき七里中  
ゆきけや鯛ももの子も分別  
中備う極く先くは神事なり  
納言はてしなく遠き  
さゆ季は秋も遠く風程遠く

節季節を少佳のころふ出さうも  
くれく餅を本魂の健勝れ  
みぬも二千日に近し餅乃喜  
煉掃やまのけり一者のさる新  
張るはくくやうな母れ煉拂  
行脚の五袋一具新波子ゆい  
くもをよけて路通うをうらむ  
くは世乃煉く扱きぬ古合子

旅行

煉掃も移の本乃宮れ嵐う那  
すくもきこ己の棚つる太工哉  
月白を脚走を子路を掃えり  
何るは歩を市子めくは  
からるは歩を海のふつう  
自れ市路を實に出るや取  
くは忘るるは年乃定なるん  
洛市雲別當景樵丸無形  
守りるは神を友めやゆわき

乙部、の勢、まゝにやまら

人々を道なきよき年を

魚身お心へ〜〜〜わす

下へいれよと意を〜〜横嫌うか

江戸の早草も飯も持ん年の暮

強持ぬ〜〜の〜〜

山〜〜の〜〜の〜〜

とて〜〜の世で〜〜のふ

と〜〜の〜〜

先ぞ〜人の好中〜人の老の暮

月を〜〜の〜〜年暮る

ゆ〜里や肺の結ぶ〜〜

流人〜〜の夜〜〜の暮

給乃生る甲斐〜〜の結ぶ

分よ結ぶ〜〜の年乃りれ

穀

凡のうゝ母の健をこゝで

世の中をいふ子に紙のやうに

之を人同

月花の古きや誅能あるしき

業をうゝるまを杖実坂に

すふ為難くちかつてくるる

よりのなきを杖つき坂を流るる

新よきよ誰まの峰を片さる  
くくま湯後よめは杖の形  
酒のこゝろ人乃強

月花もさるく酒のむらりね  
或は形得こそ

海りぬる雨やさくたうき身者

布袋の強傑

物かーや袋の中乃月と毒

寬政元歲酉七月再版

洛陽蕉門書林

井筒屋庄兵衛  
搦屋 治兵衛

下冊九

蕉門紀譜書肆

大坂心齋橋通

奈良屋長三

同

卷三即



